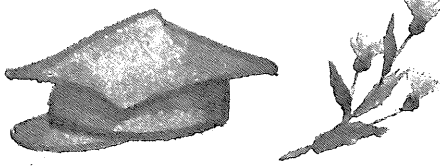


## 旧制高校の入試の歴史 (1)



名古屋大学教育学部教授

佐々木 享

## 厳しかった高校入試

旧学制下の入学試験の中で競争がつねに最も厳しかったのは、旧制高校の入試であった。この高校入試の決め手は、ほとんどつねに、一点を争う学力試験であった。しかしいまもそうであるが、入試をめぐる競争の厳しさは、入学者に対する志願者の倍率（競争率）の高さだけで表されたわけではない。競争率の高さだけをみれば、旧制高校のそれと同水準かそれ以上に高い学校も少なくなかった。旧制高校は、そこを卒業すると原則として無試験・無選抜で帝国大学に進学することが認められていた学校であった。1918年までその本科に相当する課程を「大学予科」と称していたことは、この学校の性格をよく表していた。高等学校大学予科へ入学することは、高級官僚をふくむエリート養成機関であり最高学府である帝国大学進学へのパスポートを入手することを意味した。それ故、高校大学予科には俊秀が押し寄せることとなったのである。

正確に言えば、1886（明治19）年以降の高等（中）学校には、大学予科のほかに医学部、工学部、法学部などの専門教育を行う学部が設置されていた。これらの学部には大学予科とは異

なって、卒業しても無選抜で帝大に進学する資格は与えられなかった。これら学部への入学志願者数は、大学予科をめざす者程は多くないのがふつうであった。高校の大学予科以外の学部は、1903年までに廃止あるいは他の専門学校に改組され、以後の高校は大学予科のみとなった。

1919（大正8）年の高等学校制度改革により、従来の大学予科は高等科と改組された。これ以後も高校高等科卒業者には帝大・官立大への入学に関して最優先の順位を与えられ、その志願者が定員以内のときは無試験・無選抜で入学させるものとされたから、高校高等科が実質的に大学進学のための予備課程であることには変わりはなかった。したがってこれ以後も、高校進学をめぐる競争は厳しくこそなれ緩和されることはなかった。

## 旧制高校入試の歴史の概要

第二次大戦後の新学制の発足に伴い、官立高校は新制国立大学の教養学部、教養部あるいは文理学部へ改組され、公・私立高校もそれぞれ新制大学に転換して、旧制高校の歴史は幕を下ろした。旧制一高の学校史『第一高等学校六十年史』は、東京大学予備門の前身東京英語学校の開設された1874（明治7）年を以て一高発祥

の年としている。旧制高校の歴史は、この年から数えると75年間、1886（明治19）年の中学校令による高等中学校発足から数えると63年間であったということになる。

四分の三世紀にわたる旧制高校の歴史は、学校制度の変遷に注目してみると次のように区分できよう。

- (1) 東京英語学校・大学予備門の時代（1874～1886）
- (2) 高等中学校の時代（1886～1894）
- (3) 高等学校令の時代（1894～1918）
- (4) 改正高等学校令の時代（1918～1948）

しかし、入学者選抜制度の変遷に注目すると、時代区分とその指標は異なったものとなり、

- I. 1874～1901
- II. 1902～1948

の二つに大きく区分した方が適切である。

第1期は、各校がそれぞれ独自の方針で入学者を選抜した時期で、上記の区分でいえば高等学校令時代の途中までがふくまれる。上記の(2)、(3)の時代は学校が複数となり、各校が独自に、多くは学力試験による選抜、いわゆる推薦入学など複数の方式を併用したので、選抜方式によって時期区分することはむづかしい。この時期には入学志願者の学力が不揃いで、というより尋常中学校が未整備で高校側の要求する学力水準の者を得ることができなかつたため、学校毎に本科つまり大学予科の下に予科さらにその下に当たる補充科を設けたりしており、このことが、事情をいっそう複雑にしていた。したがってこの時期の入学者選抜のための学力試験は、後年のそれとは異なって、競争試験というよりは、学力検定試験の性格の色彩が強かったといえることができる。

1902年に始まる第II期は、整備された中学校

が全国的に多数出揃って、年々万を超える中学校卒業生が輩出されるようになった事態に対応して、複数の高校の入学者選抜が統一の方針のもとに運用されるようになった時代である。1919年の高等学校令以後は、官立高校の数もふえ公立私立の高校も現れるようになったが、官立高校の入学者選抜を統一の方針のもとに実施する方式は、最後となった1948年の入試まで貫かれた。

複数の学校の入学者選抜を単一の統一の方針のもとに実施する方式は、他の学校にはみられない高校特有のものであった。これは、すべての高校卒業生が帝大および1919年の大学令によって次々と創設された官立大学の入学に関して、すべて同等に扱われたことに関係していた。

第II期の高校入学者選抜については、後述のように、種々な方法が実施された。したがって選抜方法による時期区分はこまかくなるが、共通試験か単独試験か、共通試験の場合には総合選抜か単独選抜かによって大きく区分することができる。

近代日本の教育史に関する著作は決して少なくはないが、現代日本でやかましく議論されている大学入学者選抜の歴史を事実にくわしく説明した書物は、天野郁夫『試験の社会史』（1983年、東京大学出版会）、拙著『大学入試制度』（1984年、大月書店）など指折り数える程しかない。このうち拙著は、戦前・戦後の大学——戦前については高校・専門学校をふくむ——の入学者選抜制度を概観したものだが、天野の上記書物は、およそ19世紀末から20世紀初めの数年くらいまでの入学試験をふくむ各種の試験の歴史を描いたものである。20世紀初めには戦前日本の学校体系がほぼ整備されたかたちで出揃ったと

表1 公私中学校の増加 (1900~1904)

年	学校数			卒業生数		
	公立	私立	計	公立	私立	計
1900(M33)	159	34	193	5,584	2,163	7,749
1901(34)	182	33	215	6,904	2,540	9,444
1902(35)	200	35	235	8,044	3,087	11,131
1903(36)	209	39	248	9,006	3,411	12,417
1904(37)	215	38	253	10,402	3,814	14,216

学校数には分校をふくんでいない。1904年の『文部省年報』による。

みられており、天野の著書はその複雑な成立過程を描きあげたわけである。高校入試に関しては、筆者のいう第Ⅰ期の実態は天野の著書に書かれている。1886(明治19)年から1901(明治34)年までの高校の入学者選抜は基本的には学校ごとに行われたから、天野の著書も充分なものとはいえないが、いまはあまり欲を出さずにこの期については同書に譲り、ここでは筆者のいう第Ⅱ期について述べることにする。

#### 共通試験総合選抜方式 (1902~1907)

20世紀にはいと中学校が急速に整備され、その学校数、卒業生数も急増した(表1。1899

表2 各高等学校大学予科の入学志願者・入学者 (1900・1901年)

年 学校	1900(M33)		1901(M34)	
一高	1,224/342	3.6	1,424/327	4.4
二高	469/225	2.1	642/190	3.4
三高	680/177	3.8	562/200	2.8
四高	361/200	1.8	598/207	2.9
五高	380/205	1.9	551/228	2.4
六高	338/129	2.6	346/175	2.0
七高	—	—	533/151	3.5
山口高	380/150	2.5	311/156	2.0
計	3,832/1,426	2.7	4,967/1,634	3.0

上段が志願者数、下段が入学者数。  
各年の『文部省年報』により算出。

年までについては前号の52ページの表1を参照)。こうしたなかで、高校大学予科への志願者も1900年の3,832名から1901年の4,967名へと急増した(表2)。しかし各校の競争率は一様ではなく、1900年についてみれば平均競争率は2.7倍であったが、個々の学校では3.8倍(三高)から1.9倍(五高)まで分散していた。1901年には、競争率は4.4倍(一高)から2.0倍(六高、山口高)まで広がった。

こうした状況になったため、文部省は1902(明治35)年4月に「高等学校大学予科入学試験規程」を制定し、これまで各校が独自の方針で実施していた入学者選抜を、統一の方針のもとに実施することとした。

1902年の規程によると、高校入試は予備試験と選抜試験に分けられた。前者は、中学校卒業の資格をもたない者に中学校卒業程度の学科試験を課し、その合格者に選抜試験の受験資格を与えるものであった。翌1903年から、専門学校令制定に伴って専門学校入学資格検定規程が制定され、この専検の合格者には高校の選抜試験受験資格が与えられるようになったため、予備試験制度は廃止された。

専検に合格すること自体がかなりむつかしかったし、独学者が専検合格の後に中卒者に伍し

て高校進学をめざす道は極めて険しかったが、険しいとはいえ必ずこうしたいいわゆるバイパスを設けていたことは、近代日本の入学者選抜制度の特色の一つとなっている。

1902年の規程でいう選抜試験が本来の入学試験である。この規程では、共通試験総合選抜と称すべき方式が採用された。全校一斉に同一の学力検査を課し、その成績によって、志望の学校、志望の部、志望の類に合格者を配当する方式である。共通試験総合選抜と称すべき選抜方式には、戦後にかなりの府県の公立高校が実施したような出身地域優先配分方式もあるが、1902年以降の旧制高校の方式は成績優先志望配分方式と称すべきものであった。

1902年の選抜試験の学力検査の日程や科目は、表3の如くであった。学力検査に先だって全員に体格検査を実施すること、学力検査は午前中のみで4日間にわたること、一高の若干の部・類を除くと外国語は英語に統一されていたこと、などはその後も長く続いた。学力検査科目は、数学に代数と幾何が入っていたので、現代風に数えると5教科8科目課されていたことになる。いずれも中学校の必修科目であった。

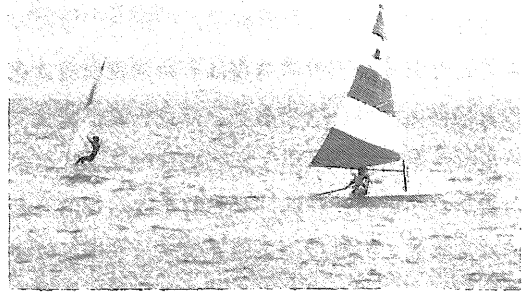
表3 1902年の高校入試の日程

日 程	科 目
7月5日午前7時より10時まで	数学
7月6日午前7時より10時まで	国語、漢文
7月7日午前7時より10時まで	外国語
7月8日午前7時より9時まで	物理、化学
同日 午前9時半より10時半まで	地理

・体格検査は7月3日、4日に（ただし、一高のみは2日から）実施。

・外国語は英語であったが、一高志願者に限り、仏法・仏文志望者は仏語で、独法・独文及び第三部（医学進学コース）志望者は独語で受験することができる。

・1902年4月25日の文部省告示による。



学力検査の日程や科目、各校の募集人員などの入試実施要項は、例年4月末か5月、つまり中学校の卒業式後、入試の2～3ヵ月以前に発表された。学力検査科目のうち国語、漢文、外国語、数学は毎年必ず課され今日の理科に属する科目、社会科に属する科目は年によって変わった。

さてこの共通試験総合選抜が実施された結果、入学者の成績とくに最低点は1、2の学校をのぞき各高校をとおしておおむね均等化した。この点に関する限り、この総合選抜方式は所期の目的をほぼ達成したといえよう。しかし、志願者は部・類についての志望と、学校については第1志望校から第7志望校までを記入することができたので、結果からみるとあまり志望しなかった学校、またあまり志望しなかった部・類にまわされたという感じをいなく学生が続出することにもなった。後の首相池田勇人や佐藤栄作も、この方式の時期に第1志望校ではなか

表4 高等学校入学者(各部・類計)の志望順位(1907年)

入学した 学 校	学 校 志 望 順 位							計
	1	2	3	4	5	6	7	
一 高	357	—	—	—	—	—	—	357
二 高	105	128	—	—	—	—	—	233
三 高	198	41	—	—	—	—	—	239
四 高	99	84	38	32	—	—	—	253
五 高	121	82	40	22	26	1	—	292
六 高	89	78	38	11	8	—	—	224
七 高	42	39	25	39	18	22	75	260
計	1,011	452	141	104	52	23	75	1,858

文部省専門学務局『明治四十年 高等学校大学予科入学者選抜試験報告』により算出。

った五高に入ったと述懐していた。

表4は、この方式を実施し始めてから6年目の1907年に高校に入学した者の志望順位をしめす。実際には各部・類ごとに多少の差があるが、ここでは総計だけをしめた。これによると、入学者全員を第1志望で充足できたのは一高のみ、第2志望の者までで定員を充足し得たのは二高、三高だけであった。反対に、七高は第1志望で入った者は僅か16%に過ぎず、第6第7志望で入った者が37%にも及んだ。あまり志望しなかった学校にまわされた感を深くする学生

を多数かかえた七高のような学校では、学生達の志気がすこぶる低調になるという事態も生まれた。

表5によってこの年の入学者の最高点・最低点をみると全校すべてが均質ではなく、いずれの部・類をとっても一高は最高・最低ともには抜けて高く、他方、七高の一部甲類、二部甲・乙類、三部は、最高点が一高の最低点と同じかそれより低い程であった。このような結果は例年翌年の出願に先立って発表されていたが、事情が改善されることはなかった。

表5 高等学校入学者の最高・最低得点(1907)

入学した 学 校	第 一 部								第 二 部				第 三 部			
	甲		乙		丙		丁		甲		乙		英		独	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
一 高	683	533	661	456	664	499	663	380	987	830	889	745	931	780	878	646
二 高	665	353			478	354			841	701	806	696	867	678		
三 高	622	420	628	354	630	358			985	771	1009	697	905	717		
四 高	565	350	520	356	508	353			917	700	810	690	882	680		
五 高	632	355	532	333	585	350			972	699	847	687	906	680		
六 高	552	365	503	331	648	351			892	706	799	706	882	682		
七 高	535	351	491	331	563	351			803	697	702	682	777	676		

出典は表4に同じ。

表6 高校入試の競争率（1908～1916）

学校\年	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916
一 高	7.38	6.20	6.79	5.99	6.72	6.26	6.13	6.42	6.17
二 高	3.96	4.34	3.39	3.98	4.55	4.76	5.02	4.12	5.53
三 高	3.01	4.04	3.43	3.71	4.41	4.76	4.55	4.37	5.33
四 高	4.40	2.95	3.25	3.58	3.33	4.77	3.72	4.42	3.99
五 高	2.92	3.04	2.91	2.53	3.18	3.72	3.68	3.75	4.02
六 高	4.09	4.03	3.62	3.04	4.98	3.71	3.92	4.17	3.44
七 高	6.55	6.22	4.66	2.65	3.19	3.41	4.93	4.21	4.23
八 高	5.45	3.22	4.14	3.10	4.64	4.31	4.81	4.64	4.72
平均	4.89	4.32	4.39	3.68	4.45	4.57	4.66	4.60	4.80

各年の『文部省年報』による。

#### 共通試験単独選抜の試み（1908～1916）

前年までの共通試験総合選抜が不評となってきた事態に対応して、1908年からは、学力検査の出願は統一するが採点をふくむ選抜は各校ごとに行うという共通試験単独選抜方式が採用されるに至った。学力検査の科目、日程等はほぼ従前どおりであった。

1908年以降の各高校の志願者の入学者に対する競争倍率は表6の如くである。各年とも一高の倍率だけが群を抜いて高かったこと、五高の競争率がいつも低かったことを除くと、ほぼ平均していたといつてよい。今日の受験産業のいわゆる隔年現象がしばしばみられることも興味深い。

七高の1908～1911年の数値だけはやや異常であった。七高の競争率は1908、1909の両年には一高のそれに匹敵する程高く、1910年も一高について高い。理由は明瞭である。共通試験総合選抜時代の学生の志気の低下・沈滞に悩まされた七高の岩崎校長が、英断をもって3年間、七高の試験期日を他校より1か月以上早め、かつ試験場を本校（鹿児島）のほか東京にも開設した

からであった。試験期日を他校とずらし、試験場を学校所在地以外の大都市にも開設するならば、より多数の志願者を集めることができるといふ簡単明瞭な教訓がここにはあった。なお、七高が試験期日を早めたといってもそれは5月あるいは6月であり、中学校の学年末（3月）の後であったから、いわゆる青田刈りではなかった。

1911年からは七高も他校と同じ共通試験に参加するようになり、これに伴って同校の競争率は急激に低下し、五高とほぼ並ぶようになった。

なおこの表によれば、1908年に設立された八高〔名古屋〕の競争率には典型的な隔年現象がみられたが、例年決して低いわけではなかった。他方、二、三、四高と並ぶ歴史をもつ五高〔熊本〕と七高〔鹿児島〕の競争率はつねに低かった。ここで注目されることは、五高と七高とが九州中南部に近接していたことである。これらは、例年ずば抜けて競争率の高かった一高を別にすれば、受験生の志望の偏りは学校の歴史だけに左右されるのではなく、むしろ、当該校が中卒者を多数輩出する地域に立地していたか否かに左右されることが多かったことを示唆していた。